

## 論 説

## 移民工文学賞という試み—包摂と排除の狭間で—

倉本 知明

はじめに

第1節 「第二の他者」から生まれた移民工文学賞

第2節 対話のチャンネルとしての文学賞

第3節 創り上げられる声

第4節 回収される声、かき消される声

おわりに

(要約)

本稿は、2014年に張正ら社会運動家によって設立された移民工文学賞の誕生背景とその受賞作の分析を行うことで、多元文化社会を目指す現代台湾が従来「第二の他者」として排除してきた東南アジア出身をどのように社会のなかに位置付けようとしているのかを考察するものである。東南アジア出身者への理解を求めて設立された移民工文学賞は、彼らに移民工といった「正名」を与え、母国語による創作を奨励することでその声を台湾社会に届けようとしてきたが、翻訳、校正、審査といった複数の他者の介入による共同創作といった性格をもつ同賞は、その過程で原作からの逸脱や誤読を繰り返してきた。また、社会問題に関心を持った台湾人読者を対象とした同賞は、彼らの「国語」から我々の「国語」へと翻訳されることによって、国内における言語的マイノリティや外国人花嫁を「購入」せざるをえない農村男性たちの声を抑圧するといった副作用をも生み出してきた。

はじめに

戒厳令解除以降、東南アジア各国から大量に「輸入」された外国人労働者や結婚移住者たちの存在は、閩南人、客家人、外省人、原住民を中心とした四大族群と呼ばれる台湾の国民構成を大きく変えてきた。しかし、こうした状況とは裏腹に80万人以上にのぼる東南アジア出身者たちは、「劣等民族」としての原住民族に代わる「第二の他者」として、これまで長らく台湾社会で差別・排除の対象とされてきた。近年台湾が東南アジア系住民を含めた新たなナショナル・アイデンティティを模索していく中で、社会運動家や文学研究者らによって2014年に立ち上げられた移民工文学賞は、それまで「外労」や「外配」の呼称で蔑まれてきた移民工たちに母国語による創作を奨励することで、彼らと台湾社会との間に「対話」のチャンネルを築き、そうした差別意識の是正に取り組んできた<sup>1</sup>。

本論考ではこうした社会的文脈を背景に、まず移民工たちの「<sup>リアリティ</sup>真実性」のある日常を描いてきた移民工文学賞が、翻訳者、校正者、審査員といった複数の「他者」との共同作業の下で創り上げられた文学賞であった点を明らかにする。そのうえで、各国の「国語」から台湾の「国語」へと翻訳された移民工文学賞が、本来雑多なクレオール空間が広がっていたはずの移民工たちのエクリチュールをどのように変化させていったのかについて考察する。

## 第1節 「第二の他者」から生まれた移民工文学賞

戒厳令解除から間もない台湾では、大都市部における安価な労働力不足と並行して、農村部における配偶者不足といった二重の人手不足が進行していた。こうした二重の人材不足を解消するために、政府は当時経済発展が比較的遅れていた東南アジアから大量に人材を「輸入」することで、当該分野における人口不足を補填してきた<sup>2</sup>。開放当初は建設業や製造業など男性労働者とその主流を占めていたが、1992年5月に制定された就業服務法において家事労働・介護関連の項目が追加されたことで、やがて同分野における女性労働者の数も急増、2017年3月現在における外国人労働者の総数は63万9326人に達している<sup>3</sup>。一方、こうした外国人労働者の増加と並走するように、1987年11月に緩和された中台間の渡航制限を皮切りに、地方の農村部を中心に海外からの結婚移住者も急激に増加した。澤田佳世が指摘するように、1990年代に急増した台湾における外国人花嫁は農村における女性配偶者不足を背景として、家事・出産・育児のような再生産労働の担い手としての女性を地方の男性たちが隣接国家から安価に「輸入」することで成立してきた<sup>4</sup>。中国大陸及び東南アジア各国から來台した結婚移住者は現在20万人を超え、彼らと台湾人男性との間に生まれた「新台湾之子」と呼ばれる二世世代まで含めると、その数は現在すでに50万人に達している<sup>5</sup>。

1980年代後半以降、東南アジア各国から大量に「輸入」された労働者及び結婚移住者の存在は、閩南人、客家人、外省人、原住民を中心とした従来の四大族群と呼ばれる国民構成を大きく変え、多元文化社会を標榜する台湾にとって無視出来ない規模になっている。しかし、その多寡に関わらず、台湾社会にはいまだに東南アジア出身の外国人労働者や配偶者への差別や偏見が少なからず存在している。外国籍の労働者を意味する「外労」は、正式には外籍勞工と呼ばれ、元来非中華民国籍の労働者一般を指す法律用語であったが、母国の経済状況やその多くが3K労働など安価で厳しい労働条件で働く状況が恒常化した結果、「外労」は長らく人種・民族差別的な用語として使用されてきた。そのことは、東南アジア出身の外国籍配偶者たちが「外配」や「新住民」と蔑みの意味を込めて呼称されてきたことにも共通している。

こうして長年に渡って「外労」や「外配」に関するネガティブな情報が行政機関やメディアを通じて発信され続けてきた影響から、東南アジア出身者は金銭目的で罪を犯す潜在的犯罪者や雇用主男性を誘惑する「淫売」としてのイメージが広く国民の間に刷り込まれ、1990年代から2000年代にかけて、台湾国内では彼らに対する露骨な差別事件が続発していった<sup>6</sup>。この点に関して、藍佩嘉は台湾におけるメディア表象や「外労」女性への聞き取り調査を通じて、東南アジア系住民が「山人」や「番仔」といったかつての「劣等種族としての台湾原住民」のイメージと重ねて語られていった点を指摘している<sup>7</sup>。また、外国人配偶者について研究者する廖元豪もグローバル化における婚姻移民の人権問題を述べる中で、レイシズムと結びついた台湾ナショナリズムがいじめやすい対象として、漢民族を中心とした所謂「台湾民族」のイメージから外れた東南アジア出身者たちが台湾社会の新たな「他者」として想像されてきたと述べている<sup>8</sup>。国民と非一国民の間に位置する「外労」や「外配」たち東南アジア出身者は、グローバル化による急

激な労働人口移動の下、「第二の他者」といったかつて台湾原住民が背負わされていたネガティブなイメージを継承させられることによって、現代台湾におけるナショナル・アイデンティティ構造の中に半ば無意識的に組み込まれることになったのだった。

しかし、「第二の他者」として台湾社会から排除されつつその周縁に包摂されてきた東南アジア出身者たちは、2000年代以降中国ショービニズムから脱却して非中華色の強い多元文化社会への脱皮を図っていた台湾政府にとって、安価（あるいは「外配」に関しては無給）で動員出来る稀有な労働力であると同時に、新たなナショナル・アイデンティティを描き直す上で貴重な人的資源でもあった。とりわけ定住が前提となっている「外配」について、政府は社会福祉サービスの情報提供や言語・職業訓練など、生活支援対策を積極的に行ってきた<sup>9</sup>。また本来ゲストワーカーであった「外労」に関して、2014年にはNGO組織などが中心となって、それまで差別的な意図で使われてきた「外労」の言葉を廃止して「移工」といった言葉の使用を推奨するなど、政府の唱える南向政策が国家戦略の一環として位置付けられていく中で、彼ら東南アジア出身者たちは急速に台湾社会の重要な構成員とみなされるようになっていったのであった<sup>10</sup>。

「外労」から移工へと呼称が変更したことについて、自身もまた社会運動に参加してきた龔尤倩は、次のようにその理由を述べている。

台湾政府が当初「外労」の文字を使用したのは、外国人のゲストワーカー政策のためで、彼らは台湾の身分証を手にも出来ないだけでなく、また移民になることも出来ない存在だった。彼らは永遠にこの社会の他者であって、政府もまたそうした考えでいた。しかし、長らくこうした社会運動のなかに身を投じるなかで、我々は徐々に物事の善悪をはっきりさせたいと思うようになってきた。現時点で移工を移民へ変えることは出来ないが、我々は「外労」がただ他所の国から移動してきた労働者であることを分かってもらいたいと思い、「移工」といった呼び方を使うようになった。(中略)それはかつて我々が原住民を「番仔」や「山人」と呼び、また外国籍の姉妹たちを「外配」や「新住民」と呼称したことに似ている。確かにそれらはただ単に文脈の問題に過ぎないのかもしれないが、しかしそれは闘争的な文脈を持っている。我々は「移工」といった言葉を用いることでこうした文脈をひっくり返そうとしているのだ<sup>11</sup>。

シンガポールや香港など、海外の華人社会において「外労」が「客工」(guest worker) と呼びかえられ、彼らの人権や社会的権利が意識されていくなかで、台湾における外国人労働者をめぐる社会運動に参加してきた龔尤倩はそれを単なる言葉の問題としながらも、「外労」といった言葉がある種台湾国民の意識を反映していると考えてきた。その意味において、差別と偏見の手垢がついた「外労」をよりニュートラルな「移工」といった言葉に書き換えることは、社会運動家たちが長い運動のなかで勝ち取った大きな成果でもあった。「第二の他者」として社会から排除されてきた東南アジア出身者にそれぞれの母国語で創作させ、それを主催者側が中国語に翻訳して発表する移民工文学賞は、まさに移工といった言葉が「闘争的な文脈」から生まれたその年

に創設されたものであったのだ。「外配」たち移民の存在に加え、「外労」たちを意味する移工の言葉を繋ぎ合わせた移民工文学の創設に関して、第一回移民工文学の呼びかけ人であった陳芳明は、「新移民（外配）と移工（外労）を主体として創作された文学である」<sup>12</sup>とその定義を述べているが、移工の言葉と共に誕生した移民工文学賞は、従来の社会的コンテクストをひっくり返す政治的な試みを広く文学空間にまで敷衍した社会運動の一環でもあった。

台湾社会が新たなナショナル・アイデンティティを再構築しようとする最中に誕生した移民工文学賞は、それまで「聾啞」とみなされてきた「外労」や「外配」たちを如何に台湾社会に包摂するのかといった課題に対する社会運動家たちによる<sup>レスポンス</sup>応答でもあったが、それは同時に従来の中華ナショナリズムや福佬ショービニズムから離脱して新たな多元文化社会を標榜する台湾にとって、多様な自我像を描く上で必要な「他者」の声を集める絶好の場所でもあった<sup>13</sup>。期せずして現代台湾におけるナショナル・アイデンティティをめぐる政治の最前線に立たされることになった移民工たちであったが、移民工文学賞には果たしてどのような声が集められ、また発信されていったのだろうか。

## 第2節 対話のチャンネルとしての文学賞

本来、人種・民族差別的な意味合いが強かった「外労」や「外配」から、移民工へ名称変更する中で誕生した移民工文学賞は、グローバル下における労働人口の移動と台湾社会におけるナショナル・アイデンティティの再構築と、その過程で生まれる差別是正を求める社会運動の一環として登場してきた。こうした背景から、移民工文学賞はその創設当初から移民工を台湾社会の一員として正式に位置付けると同時に、移民工文学受賞者に移民工と台湾社会との間をつなぐ対話のチャンネルとしての役割を期待してきた。

移民工文学賞の設立を企図した張正は「台湾立報」の元副編集長で、台湾初の東南アジア言語による雑誌「四方報」で編集長を勤めるなど、これまで移民工に関わる社会運動に深くコミットしてきた人物であった<sup>14</sup>。移民工文学賞設立の発端について、張正は文学研究者黄湯姆や人類学記者阿潑らと「少数民族の子孫らによる文学」について議論している際、偶然移民工のエクリチュールを正典化するといったアイデアから連想したものであったと回顧している<sup>15</sup>。台湾国内で暮らす80万近い移民工たちのエクリチュールが台湾文学の内実をより豊かにさせ、またそれによって移民工たち自身も自らの声をもつことができると考えた張正は、「それがどのような族群であれ、この台湾という土地で起こったあらゆる感情、記憶は台湾文学に属する」といった陳芳明の台湾文学に関する定義をいわば「流用」することによって、移民工文学賞設立の理論的根拠としたのだった。

呼びかけ人のひとりであった陳芳明自身、移民工たちの母国語によって書かれた移民工文学賞を「これまで聞くことのできなかつた声」を聞かせてくれる「対話のパイプ」であると述べ、所謂「台湾意識」と呼ばれるものがすでに「閩南・客家などの族群によって独占されるものではない」ことを指摘している<sup>16</sup>。そのうえで、移民工にルーツを持った「新台湾之子」が台湾社会の

あらゆる場面で受けてきた差別が、そのまま台湾における公正や正義の未発達に繋がるものであること、そして移民工文学賞がそうした彼らの声を可視化させる役割を担っているのだと述べたのだった。

これまで「第二の他者」として社会のなかで発言権を奪われ、その立場を表明することが出来なかった移民工たちは、まさにガヤトリ・スピヴァクが述べるサバルタンのような存在であったが、そうした「聾哑」状態に置かれてきた彼らに声を与えようと創設された移民工文学賞は、これまでの文学賞には見られなかった多言語による創作をその基本ルールとしてきた。創作はインドネシア語、ベトナム語、タガログ語、タイ語の四言語が基本とされ、制限文字数は3000字、短編小説、散文、詩がその審査対象となった<sup>17</sup>。第一回では260篇、第二回では180篇、第三回では217篇の作品が主催者側に投稿され、投稿者の国籍は例年インドネシア、フィリピン、ベトナム、タイの順に多く、宋家瑜は投稿者の大半が女性であった可能性を指摘している<sup>18</sup>。

これらの作品はまずインターネット上で母国語読者たちがノミネート作品を選出した後、同じく台湾国内にいるネイティブ話者（主に「四方報」関係者や台湾の高等教育機関で働く東南アジア出身者）によって作品が中国語へと翻訳され、台湾人スタッフの校正・修正を経て、作家や映画監督、大学教授を中心とした台湾人審査員が講評するといったシステムを採用してきた。審査員に関しては毎年変更されているが、第一回目は陳芳明、黄錦樹、駱以軍、丁名慶、顧玉玲、第二回目が朱天心、蘇碩斌、李美賢、周月英、曾文珍、第三回目が李崗、李瑞騰、吳明益、阿滄、陳素香といった錚々たる顔ぶれで、それぞれ大賞1名（賞金10万元）、審査賞1名（8万元）、優秀賞（2万元）若干名を選出している。第二回目以降は「新台湾之子」を審査員に加えて更に青少年賞（賞金2万元）を創設、第三回目以降は審査に加わった二世たち自身に自らの母親についての文章を投稿・掲載させるなど、母国語が読めない二世たちを文学賞選考のプロセスに参加させることで、その範囲を移民工から次代にまで拡大しようとする意図が見とれる。年を追うごとに規則に若干の変更は見られるが、中国語を第一言語としない移民工たちがそれぞれの母国語で創作して、それを翻訳・出版するといった基本的なスタイルは、第三回目の現在（2016年）まで引き継がれている（例年の受賞作品と受賞者、及びその概要については図1を参照）。

多言語による創作を前提とした投稿条件は、投稿者たちにホスト社会まで届く声を与えようとした結果生まれた試みであったが、そのシステムは同時期台湾国内で相次いで設立された母語文学賞ともいくつかの点で趣を異にしている。2000年の民進党政権誕生以降、本土意識が急速に高揚していた台湾国内では、2001年から小学校における選択的母語教育の実施など母語が重視される傾向にあったが、文学創作の分野においても2008年に台湾教育部が「美しい本土言語文化」を後世に残すために設立した閩客語文学賞と同じく同年に国立台湾文学館が主催となって設立された台湾文学賞本土母語創作賞などによって、それまでの「国語」中心によるエクリチュールから離脱するように、母語文学賞の設置が積極的に進められていた<sup>19</sup>。しかし、これらの文学賞では国内における潜在的な母語話者たちを対象とするために、比較的読者が少ないとされる原住民言語による創作ですら、移民工文学賞のように翻訳者や校正者といった第三者が受賞の過程において作品に積極的に仲介することはなかった<sup>20</sup>。

一方、台湾国外に目を転じてみれば、ホスト社会が外国人労働者に創作や文学賞の場を提供するといった現象は、シンガポールや香港など東南アジアに隣接する華人社会で同時多発的に起こっているが、こちらも投稿者の母国語をそのまま掲載するなど基本的に異国で生活する母国語読者たちに向けて発信されてきた<sup>21</sup>。しかし、台湾人読者に向けて創設された移民工文学賞は、その性格上どうしても中国語への翻訳・校正といった手続きを踏む必要があるために、国内外における他の非「国語」創作による文学賞とも違って、より強く台湾人読者の存在を意識した構造となったのだ。それは同賞があくまで「多くの台湾人に普段自分たちが見下している東南アジア文化について知ってほしい」（張正）といった「対話」のチャンネルとして期待された結果でもあった。

当初審査を担当した台湾人研究者や作家たちの間で移民工文学賞を一種の道徳的な尺度として捉える向きがあったことは、それがあつた種の「対話」であつたことを考えれば非常に興味深い。マレーシア出身の華人作家黄錦樹は、同文学賞を「台湾の数ある文学賞の中でも最も倫理的な文学賞」と述べ、李美賢も文学賞の審査を「(不)正義」といった抽象的な概念を最も経験可能で、触れられる世界へと具体化したもの」と述べている<sup>22</sup>。審査過程において自らの罪悪感について述べ続けていた駱以軍は、「もし『文学賞』に社会的な機能があるとすれば、移民工文学賞の衝撃は大きく、その複雑さは多義に及んでいる」と述べているが、移民工文学賞はまず、台湾人読者（少なくとも審査員たち）には、倫理的な問題として受け取られてきたのだ<sup>23</sup>。

しかし、彼らの描く作品が道徳的な意義を備えていると思われたがゆえに、受賞作品には自然と移民工たちの生活に基づいた「リアリティ真実性」が重視される傾向があつた。実際、受賞作品の多くは移民工たちの経験を基にした私小説的な作品が多く、また第二回審査員を務めた朱天心に至っては、投稿作品が移民工たちの不幸を過剰に述べ立てた「災難大全」となることを恐れ、作品の真偽は「道徳的」な命題であるとして、移民工たちの描く「リアル真実」にこそ価値があると主張している<sup>24</sup>。しかし、裏を返せばそうした作品への「真実性」の追求そのものが、移民工文学賞の役割があくまで社会から排除されてきた移民工と台湾社会を繋ぐ「対話」のチャンネルであつたことを証明する結果にもなっているともいえる。

それでは、翻訳、校正、審査といった複数の過程を経て受賞作品が決定される移民工文学賞において、移民工たちの描いた「真実」はどのように「対話」の俎上に載せられることになったのであろうか。

### 第3節 創り上げられる声

移民工に関する社会問題に長年身を投じてきた張正ら「四方報」関係者にとって、移民工文学賞の設立は何よりも現下における「不正義や不公平」（陳芳明）を糾すために行われた社会運動の一種であつて、それはすなわち、多元文化を理想とする台湾社会が抱える道徳的な問題でもあつた。しかし、その動機は善し悪しは別として、台湾社会との積極的な「対話」を求めて創設された移民工文学賞は、まずその前提として翻訳者と校正者、そして審査員といった文学賞内部の「他

者」と積極的な「対話」を行う必要があった。前述したように、移民工文学賞は投稿から受賞までに(1)台湾国内のネイティブによる翻訳、(2)台湾人スタッフによる校正と修正、(3)作家や大学教授を中心とした台湾人審査員の講評といった三つの「対話」を経ることにその特徴があった。ここではまず、繰り返される「対話」によって原文がどのように改編、あるいは「誤読」されていったのかをみていきたい。

まず、(1)の台湾国内のネイティブによる翻訳に関しては、移民工文学賞の母体となった「四方報」関係者や台湾国内の外国語教育関係者が中心となっているが、ここで問題となったのが、母語翻訳者が選んだ作品と台湾人審査員が選んだ作品評価の食い違いであった。母国語翻訳者と台湾人審査員の間に起こった選考基準の相違に関しては、自らもスタッフの一員として(2)の台湾人スタッフによる校正と修正に関わった宋家瑜の研究に詳しく述べられているが、宋はその研究においていくつかの「誤読」が受賞の過程において生じていたと主張している。たとえば、第一回の大賞作品となったベトナム出身の芒草香の「他郷之夢」について、その翻訳を手がけた楊玉鶯(中央研究院民族所研究アシスタント・『四方報』ベトナム語訳者)は、次点で審査員賞となった古藍の「龍眼成熟時(リュウガンのなる頃)」の方が大賞に相応しかつたと回想している<sup>25</sup>。経済的な理由から台湾人男性へ嫁ぎ、そこで夫からのDVなどに耐えながらも強く生きていこうとする「他郷之夢」の末尾に記された「女の一生はさながら運命のようなもので、どこに身を置こうがそこは澄み切っているし、濁ってもいる」の一文に「思わず鳥肌が立った」(駱以軍)と大賞を決定した審査員に対して、楊はそれがベトナム語の諺に過ぎず、しかも通俗的な歌詞にしばしば汎用される言葉であることを指摘している<sup>26</sup>。また、同じくベトナム出身で第一回目の優秀賞となった黎翠湾の「夜裡の日記(夜の日記)」についても、楊は同様に投稿者のベトナム語能力を問題にしながらかその文学センスに疑問を投げかけている。亡くなった父親への手紙の形式で異郷での不安な胸の内を告白する同作品について、楊は「(投稿者の)ベトナム語はひどいもので、何度も同じ言葉を繰り返している。お父さんお父さんお父さん……本当にそこまで悲しむようなことでしょうか」<sup>27</sup>と、作品にかなりネガティブな評価を与えている。一方、審査員を務めた駱以軍は同作品を「1930年代における左翼小説のようで、日記の形式が泣き声に力を与えている」<sup>28</sup>と、翻訳者とほぼ真逆の評価を与えているのだ。

母国語翻訳者と台湾人審査員の評価が極端に分かれた背景には、まず審査員の多くが東南アジアの基本的な文化背景を十分に理解していなかったことに加えて、駱以軍の「左翼小説」発言に見られるように、彼らが翻訳された作品を台湾の歴史・文化的な背景から読解したことがあった。台湾人雇用主から時計を盗んだことを疑われ、自らの潔白を必死に証明しようとする主人公の健気さを描いた「夜裡の日記」は、ある意味で階級意識と民族差別が文学的なテーマとしてしばしば取り上げられた1930年代の左翼文学と通底する点があると同時に、現下の台湾における同様の社会問題を強烈に反映した作品であった。また、それが台湾の物語でありながら外国語からの翻訳作品であるといった点からしても、審査委員たちは同様の作風が多く描かれた日本統治期における台湾文学を想起したものと思われる。

そして第二に、楊が「ひどいベトナム語」の原文を「正確な」中国語へと修正していったよう

に、翻訳者の過度の介入（あるいは不介入）や文学的素養によって、作品のクオリティが大きく左右されてしまった点があげられる。各国語の翻訳者に関しては、前述したように「四方報」関係者や大学など高等教育機関に従事する東南アジア出身者が中心となって行われているが、その職業は前述した楊玉鶯のように普段から「洗練」された中国語に触れられる高学歴・ホワイトカラーの人間もいれば、鍍金工場の労働者（王磊・インドネシア語）やホームヘルパー（金粉・タイ語）といった、所謂ブルーカラーに属している者たちもいた<sup>29</sup>。こうした翻訳者と審査員の意見の相違について、第一回目の審査員であった黄錦樹は本来ならば東南アジア言語を理解できる人間を審査員に加えるべきであったと述べながら、移民工文学賞における翻訳者の関与の大きさや彼らの中国語表現及び鑑賞能力によって作品の評価が大きく変ってしまった点を指摘している<sup>30</sup>。謂わば、審査の過程において翻訳者が投稿者にとっての重要な「協力者」の役割を演じることで、投稿者／翻訳者の二人三脚で作品が共同で「創作」されていくことになっていったのだった。

投稿者と翻訳者の間に築かれた協力関係とそれにもなまって起こった原文との食い違いは、翻訳の正確さの問題だけに止まらない。本来異なる翻訳者による中国語訳といった不公平性を解消するために機能していた(2)台湾人スタッフによる校正と修正も原文と訳文の間にある種の食い違いを生み出す結果となっている。

自らも投稿作品の校正作業を手がけた宋家瑜は、校正者が中国語を第一言語としない訳者が翻訳した文章をより自然で文学的な中国語表現へと修正していったことを明らかにしているが<sup>31</sup>、こうした校正作業は作品細部における表現方法だけでなく、実にそのタイトルにまで及んでいる。たとえば、第二回優秀賞を受賞したインドネシア出身の Erin Sumarsini の作品「江子翠的勇士（江子翠の勇士）」は、実体験を中心としたノンフィクションが多いなかで、2015年に台北メトロ江子翠駅で実際に発生した通り魔殺人事件をモチーフにした数少ないフィクション作品であるが、同作のタイトルはもともと「江子翠膽大妄為的變態男（江子翠の大胆不敵な變態男）」であった。物語はヘルパーとして裕福な家に雇われた主人公の女性が不幸にも江子翠駅の通り魔殺人犯に遭遇するが、そこで自分が介護していたはずの老人から助けられ、その不屈の勇気を褒め称えるといった内容だった。しかし、校正者が審査員に原稿を渡すにあたって、「變態男」のタイトルが文学的でないとの理由から削除され、「勇士」へと書き換えられたのであった<sup>32</sup>。「變態男」と「勇士」ではそもそも物語の軸の置き方自体に相違が生まれるが、こうした配慮もまた、複数の「対話」が受賞に至る過程において積み重ねられてきた結果であった。

以上の審査過程を見ても分かるように、移民工文学賞における三つの「対話」とは、作品が台湾人の読者に読まれるにあたって準備された、ある種の「創作」活動でもあった。言葉を換えれば、移民工文学賞とは国籍や性別、年齢や階級の異なる移民工たちの生の声を一般の台湾人たちに届けるというよりも、翻訳者、校正者、審査員といった三段階の「対話」を経て、さながら一枚の布を共同で織り上げるように受賞作を創り上げていくことにその特徴があった。そうした「創作」の過程において、移民工たちの声は修正・変更を余儀なくされ、文学への深い素養をもった審査員たちはその修正された声を自らの文化的背景に合わせて「誤読」することによって、「普

段自分たちが見下している東南アジア文化」と「第二の他者」を含めた新たな多元文化国家建設を目指す台湾社会との間に道徳的な「対話」のチャンネルを作り上げていったのであった。

#### 第4節 回収される声、かき消される声

しかし、受賞作品を主催者側と共同で「創作」する過程において起こった最も大きな問題は、翻訳・校正作業を経た作品が、純粋に投稿者の生の声を反映していないといった「<sup>リアリティ</sup>真実性」をめぐる議論などよりも、むしろその声の多様性を確保するためにとられた外国語による創作・翻訳といった投稿条件が、テキストにおいて特定の声を抑圧してしまっている点にあった。一般的な外国文学作品とは違い、移民工文学は翻訳を必要としながらもあくまでその多くが台湾国内で発生した物語となっているために、本来そこには創作者の母（国）語に加えて、中国語や閩南語、客家語や原住民諸言語など、移民工たちが生活する上で触れざるを得ない複数の言語空間が出現する場所であった。しかし、台湾人読者との「対話」を前提に翻訳や校正作業を徹底した結果、逆にそのエクリチュールが持つ多様性を「国語」の中に押し込めるだけでなく、それ以外の言語を常用する国内のマイノリティたちの声<sup>フィルタリング</sup>を濾過<sup>フィルタリング</sup>にかける事態になってしまっているのだ<sup>33</sup>。

第一回大賞作品である芒草香の「他郷之夢」や審査員賞作品である古藍の「龍眼成熟時」、また阮錦垂の「離郷孩子的的心声（故郷を離れた子どもの叫び）」、更に第三回目の優秀賞作品である陶小媚の「擘裂（裂ける）」など、経済的な理由から母国から台湾地方の農村に「売られてきた」女性たちを描いた物語は、基本的にどれも「国語」に翻訳され、登場人物たちも一見「国語」を話しているように見える。しかし、地方の農村を背景に描かれたこれらの作品の登場人物たちが日常的に彼らの母国語、あるいは「国語」だけのモノリンガルな生活をしてきた可能性は非常に低い。実際、移民工たちの多くは（日本植民地統治下の多くの台湾人がそうであったように）完全な「国語」の内でも外でもなく、その周縁で複数の言語を跨ぐようにして生活しているケースが多い。台湾社会の周縁で暮らす多くの移民工たちにとって、家庭や勤務先などその生活圏内で使用される言語は、自らの母（国）語だけに止まらず、閩南語や客家語、そしてときには原住民言語など、複数の言語を日常的に使用しているのだ<sup>34</sup>。しかし、台湾社会との「対話」を目指して設立された移民工文学賞は中国語のリテラシーを備え、また社会運動にある程度関心を持った都市部の台湾人読者層を対象に、自然で「文学的」な「国語」へ翻訳することを試みた結果、現実における多言語状況は、テキストのなかではむしろ不可視化されてしまっている。

もちろん、読者が「国語」に翻訳された文章からその声の多様性を聞き取ることはそこまで難しいことではない。第二回移民文学賞で優秀賞を獲得した Carla F. Padilla の「農田彼端（田畑の彼方）」は、フィリピン人女性の主人公が工場で働く中で国籍の違った同僚たちと出会い、不安に満ちた異郷での生活に希望を感じるといった内容が「国語」によって記述されているが、読者はその背景に複数の言語が飛び交っている様子を想像することができる。來台直後は中国語を聞き取れず、「まるで凍りついた大海原に投げ込まれたようだった」と感じていた主人公であったが、「マミー」と呼ばれる中国人配偶者や「兄さん」と呼ばれるフィリピン人の母親を持つ台湾

人の仲介業者、22歳で台湾に亡命してきた閩南語が流暢なミャンマー人の親友など、国籍や言語の異なる人々との交流を通じて、主人公は徐々に異国での生活に慣れてゆき、台湾で新たな「家族」を手に入れることになる。現下の台湾における多文化状況を好意的に描いた本作はタガログ語から中国語へ、謂わばフィリピンの「国語」から台湾の「国語」へと翻訳されているが、読者は本来主人公たちの会話がフィリピン訛りの英語や大陸訛りの中国語、閩南語や台湾国語など、複数の言語を組み合わせたピジン語で行われていた可能性をこのふたつの「国語」の裏側に読み取ることができる（更に言えば、フィリピンのような多言語国家から来た移民たちにとって、彼らの「国語」は必ずしも創作に最も適した第一言語であるとは限らない）。

また、直接「国語」以外の言語の存在が示唆されていない場合でも、その状況から主人公が日常的に「国語」の周縁で暮らしていることを想像できるケースもある。例えば先述した「他郷之夢」において、友人に裏切られた主人公は失意の中で台湾人男性に嫁ぐことを決めるが、投稿者（翻訳者）はわざわざ閩南語の発音で主人公が「台湾郎」に嫁いだと記述している。そこで、読者は主人公が「国語」が常用される都市ではなく、地方の閩南語の世界へと入っていったのだと想像できる仕掛けとなっている。

本論の冒頭でも述べたように、戒厳令解除以降、台湾政府は海外から安価な女性を「輸入」することで減少を続ける国内人口の再生産を試みてきたが、そうした安価な女性の身体を通じた人口の再生産を実践してきたのが、「低収入・高年齢」の地方出身男性たちだった。夏曉鵬の指摘によれば、中国や東南アジア出身の女性を娶った男性たちの多くは台湾の高度経済成長とともに大きくなった閩南語を日常的に使用する農業従事者たちで、その年齢も30歳以上の中高年が大多数を占めていた<sup>35</sup>。「他郷之夢」において、ベトナム語しか話せない赤子を抱いて台湾にやって来た「私」は、「台湾郎」の夫から「ベトナム人妻であるというだけで」「冷たくされた」と嘆くが、悲惨な体験を軸にした私小説的な作品が多い（あるいは賞を取り易い）移民工文学賞において、外国人妻に冷たくあたる「台湾郎」男性たちが本来抱えているはずの複雑な社会状況は、「国語」に翻訳された移民工女性たちの声の裏にすっかり隠されてしまっている。ホスト社会との積極的な「対話」を前提とした移民工文学賞は、本来移民工たちが日々体験している言語的多様性を「国語」の内部に回収してしまっているが、それは単一言語によって作品全体が平坦化されているといった問題だけに止まらず、閩南語を日常的に使用するような「台湾郎」たちの抱える苦悩をモノリンガルなテキストの中で抑圧する結果にもつながっているのだ。

移民工文学賞の多くの受賞作において、「社会の底辺」（駱以軍）に生きる「台湾郎」たちは、しばしば主人公たちを搾取る資本家と同様にヒールの役割が振り当てられているが、グローバル化の一方の被害者でもあった第一次産業に従事する男性たちが抱えてきた苦しみは、肯定的な評価が多勢を占める移民工文学賞をめぐる言説において、これまでほとんど注目されてこなかった。こうした事態は、道徳的な「対話」のチャンネルの建設を目指して社会運動家や知識人層を中心に設立された同賞が、皮肉にも移民工女性たちと同じくグローバル経済の「落伍者」である男性たちからその声を奪ってしまった結果ともいえる。

一方、そうした「社会の底辺」に生きる男性たちの声に積極的に耳を傾けるのが投稿者の大半

を占める女性ではなく、男性たちであったことは非常に興味深い。第三回移民工文学賞の大賞と青少年審査員賞をダブル受賞したインドネシア人男性 Justo Lasoo の「海浪之歌」は、横暴な雇用主に反発を覚えながら漁業に従事していた主人公 Yadi が、雇用主の不幸な家庭状況を知ることと徐々に心を開き、やがて打ち解けていく物語となっている。嵐の夜に漁に出たまま帰らぬ人となってしまった父親の影を雇用主に見る Yadi と麻薬使用の罪状で逮捕された息子に代わって Yadi を「わが子」と呼び、彼を家族の一員として迎え入れていく雇用主は、失われた家族（あるいはあるべき家族像）をお互いの身の上に投射していくことで、台湾人雇用主／外国人労働者といった民族・階級の壁を乗り越えていく<sup>36</sup>。また、同じくインドネシア人投稿者の作品で、第三回優秀賞を受賞した Prabu Agnyna の「先輩（先輩）」もまた、昏睡状態にある雇用主男性の声なき声に耳を澄ませる外国人介護師の様子が描かれている。「先輩」と呼ばれる昏睡状態にある元秘密警察の老人を介護するアリは、亡くなった日本人妻を愛する彼の態度に強く心を打たれる<sup>37</sup>。やがてアリのもとを訪れた通訳者は、「先輩が当初あなたを介護師として選んだのは、彼があなたから自分自身を見たような気がしたから」と述べ、アリもまた亡くなった「先輩」を前に、「この素晴らしい男は私に見返りを求めない愛とはなにか、人生の本当の意義とはなにかを教えてくれた」<sup>38</sup>と感嘆し、かつて不妊を理由に離縁した妻を呼び戻すことを心に決めるのだった。

「社会の底辺」で生きる「台湾郎」らが抱える怒りや悲しみに共感する移民工男性たちは、既存の家庭の中で抑圧・排除される移民工女性たちと違って、母国にいる自らの「家庭」を補填する合わせ鏡のような存在として「台湾郎」たちの声なき声に耳をすませている。一方、こうした叙述スタイルはグローバル経済の落伍者である「台湾郎」たちに金で買われ、男尊女卑など古い価値観が支配する家庭の中で再び抑圧されるケースが多かった女性たちの作品には見られない特徴でもあった。それはまた、家庭の中で働く「移民」女性と、家庭の外で働く「移工」男性の立場の違いから生まれた視点でもあったといえる。こうした移工男性たちの描く作品は、「国語」によって一度は回収され、かき消されてしまった「台湾郎」たちの声と同じくマイノリティである自らの声を重ね合わせることによって、女性たちとは違った視点を移民工文学賞に書き込む結果となったのであった。それはまた、移民工文学賞が回を重ねる毎にその問題意識を広げ、移民工をめぐる様々な問題をより深く包摂していこうとすることへの表れである。

## おわりに

本土意識の高揚とともに、現代台湾におけるナショナル・アイデンティティ構造に組み込まれた東南アジア出身者たちに対する差別是正を掲げて誕生した移民工文学は、複数の言語が並存・混交する現代台湾の周縁社会を「国語」によって再記述（翻訳・校正）することで、読者に自らの故郷を異郷として暮らす移民工たちの声なき声を聞かせることに成功してきた。しかし、本来雑多なクレオール空間が広がっていたはずの彼らのエクリチュールを「国語」によってモノリンガル化してしまったことで、主催者側は多様な族群・階級・性別の声と、そこに隠された別の被害者たちの声を読者がともすれば聞き漏らしてしまいかねない状況を作り出してしまった。その

意味で、移民工文学賞を読む読者には「創り上げられた」移民工たちの声から道徳的な「罪悪感」を感じ取るだけでなく、複数の言葉が交じり合い、ピジン化された移民工たちの言葉のシンフォニーを常に二つの「国語」の向こう側に読み解く力が求められる。そうすることによってはじめて、様々な出自をもった移民工とその子孫たちの声が、閩南、客家、原住民言語といった既存のマイノリティ言語とは違った形で、台湾における正統な「国語」の地位を揺るがすことができるのかもしれない。

図表1：移民工文学賞例年受賞作品一覧

## 第一回移民工文学賞受賞作 (2014年)

作者	作品	受賞	内容
名前：芒草香 国籍：ベトナム 性別：女性 職業：主婦	他郷之夢	大賞	主人公は貧困から台湾へ出稼ぎに出るが、信頼していた友人に恋人を寝取られ、台湾人男性との結婚を決意。夫婦関係は悪く、夫からは日常的にDVを受けるが姑との関係は良好、幼い子供を抱えながら毎日を強く生きようと決意する。
名前：古藍 (黎黄協) 国籍：ベトナム 性別：男性 職業：大学院生	龍眼成熟時	審査員賞	嘉義の龍眼農園で働くベトナム人妻の物語。夜学での勉強を希望する主人公は夫から理解を得るが、姑からは家事に専念するように反対される。しかし、孝行を尽くす嫁の姿に感動した姑はやがて夜学での勉強を許すことになる。
名前：阮錦垂 国籍：ベトナム 性別：女性 職業：主婦、通訳	離郷孩子の心聲	優秀賞	主人公は故郷で貧しい生活を経た後、従姉妹の紹介で台湾人男性との結婚を決める。義父の介護を懸命に行うも、男尊女卑意識の強い夫は主人公に冷たくあたり、浮気を繰り返す。やがて離婚して、母子二人で強く生きていこうと決める。
名前：Erin Cipta 国籍：インドネシア 性別：女性 職業：介護師	業豊とカロスの故事	優秀賞	主人公は台湾人の家庭で介護師をしているが、そこでダウン症の息子業豊と愛犬カルロスの強い絆を目にする。しかし、カルロスの病を知った業豊はカルロスを連れて家出する。主人公は家族と彼を探し出そうと懸命に走り回る。
名前：金粉 国籍：タイ 性別：女性 職業：介護師	友誼無境界	優秀賞	主人公は貧困からわが子をタイに残して台湾に出稼ぎに出る。異郷での生活を心配していたが、雇用主は主人公に優しく、台湾の人間関係に感銘を受ける。台湾を人情に厚く、人権意識の発展した国であると賞賛する。
名前：黎翠湾 国籍：ベトナム 性別：女性 職業：介護師	夜裡の日記	優秀賞	主人公は亡くなった父親への手紙の形式で、異郷で不安に満ちた心の内を告白する。不注意から腕時計を失くした雇用主から盗みを疑われるが、懸命に自らの潔白を主張する。後に誤解であることが分かり、雇用主とは和解する。
名前：Sri Yanti 国籍：インドネシア 性別：女性 職業：介護師	叙利亞の黒煙	優秀賞	友人の話に基づいたフィクション。シリア内戦に巻き込まれたインドネシア人介護師が、シリア人雇用主の家族と内戦の続くシリア国内を避難するが、避難の途上で空爆に巻き込まれ、死亡してしまう。
名前：Nanik Riyati 国籍：インドネシア 性別：女性 職業：介護師	誠実と順従	優秀賞	高学歴の家庭に雇われた主人公は、大学教授の雇用女性とその父親の面倒を見る。イスラムのヒジャブを身につけさせて欲しいと願うも雇用主からは強く反対される。仕事への誠実さと信仰への順従さの間で揺れる主人公の内面を描く。

## 第二回移民工文学賞受賞作 (2015年)

作者	作品	受賞	内容
名前：Dwiita Vita 国籍：インドネシア 性別：女性 職業：家政婦	宝島框架背後の肖像	大賞	雇主の悪待遇に耐える者、同胞男性に入れ込み借金する者、半身不随の老人の介護をして監禁状態に置かれる者、信仰の自由を保障された者。主人公は様々な境遇にある移民女性との交流から彼らの肖像を描き出す。
名前：范雄協 国籍：ベトナム 性別：男性 職業：大学院生	母親的遊戯	審査員賞	国費留学生として海外で成功して家庭を築いた息子を故国で指折り待ち続ける母親の姿を描いた作品。息子の建てた広い家に一人で暮らし、母国語を話せない孫と息子の帰国を待つ母親の孤独を描く。
名前：阿南 国籍：タイ 性別：男性 職業：工場労働者	友誼と音楽之宝蔵	優秀賞	台湾に出稼ぎにやってきた主人公が善良な台湾人たちに出会い、母親や岳父の死を乗り越えていく物語。経済的にも成功して、二人の娘を大学に進学させる。娘は日本への留学を止めて、台湾での留学就職を決意する。
名前：Carla F. Padilla 国籍：フィリピン 性別：女性 職業：工場労働者	農田彼端	優秀賞 青少年 審査 推薦賞	母国で作家をしていた主人公が、家族を養うために台湾で工場労働者になる。フィリピン国籍の仲介業者や中国人同僚たちの支えの下で、主人公は異郷で新たな家族を得て、台湾での生活に希望を感じる。
名前：Erin Sumarsini 国籍：インドネシア 性別：女性 職業：家政婦	江子翠の勇士	優秀賞	介護老人と地下鉄に乗車したところ、主人公は江子翠の通り魔殺人事件に遭遇。そこで件の老人に助けられるが、後に彼が病に蝕まれていることを知る。病にも負けない彼を主人公は本当の勇士だと称える。

名前：Arumi Olive 国籍：インドネシア 性別：女性 職業：介護師	早晨之前	優秀賞	病院で臨終の老婆を看取るヘルパーの心の内を描いた作品。自分の本当の母親のように慕う老婆を看取る主人公は老婆が死を迎えた後、彼女に向けて書いた手紙を大海原に向かって投げることでのその死を悼む。
名前：Keyzia Chan 国籍：インドネシア 性別：女性 職業：介護師	WIN	青少年 審査 推薦賞	主人公は雇主の息子と恋をするが、精神的に不安定な雇主の母は恋人と暮らすために祖母を殺そうとする。殺害現場に偶然出くわした主人公は逃亡、やがて売春業に身をやつすが、そこで警察官となった恋人と再会する。
名前：古藍 (黎黄協) 国籍：ベトナム 性別：男性 職業：大学院生	夢寝	青少年 審査 推薦賞	老人ホームで働く人介護師の主人公は順調な生活を送っていたが、コールセンターに連絡したことが仲業者に発覚、仕事から逃亡する。逃亡先の漁村で新たな人々に出会うが、やがてそれら全てが夢だったことに気付く。

第三回移民工文学賞受賞作 (2016年)

作者	作品	受賞	内容
名前：Justto Lasoo 国籍：インドネシア 性別：男性 職業：漁師、FLP 会長	海浪之歌	大賞 青少年 審査員賞	台湾で漁師をする主人公は粗暴な雇主と険悪な関係にあったが、やがて彼と親子のような関係を築く。幼い頃父を失った主人公は雇主に亡父の面影を重ね、船が難破した際に両者の絆は確かなものになる。
名前：Abdul Mubarak 国籍：インドネシア 性別：男性 職業：工場労働	LIR ILIR	審査員賞	台湾で働く主人公はラマダンを実践しながら工場労働に勤しむ。何度も戒律を破りそうになるが、母の励ましを思い出しながら、仕事と戒律を両立させる。台湾で母の死を知った主人公はその偉大さを知る。
名前：陶小媚 国籍：ベトナム 性別：女性 職業：主婦	撃裂	優秀賞	故郷の父母への孝行から恋人を棄て台湾人に嫁いだ主人公は、婚姻関係の挫折から夫家に放火して終身刑に。当初は異国の刑務所で絶望していたが、やがてそうした生活が自らを変えていくことに気付く。
名前：Prabu Agnyna 国籍：インドネシア 性別：男性 職業：介護師 (記者)	先輩	優秀賞	「先輩」と呼ばれる元秘密警察官の介護をする主人公は、早死にしてしまった日本人妻を懐かしむ彼の愛情に心打たれる。彼の死後、主人公は帰国して不妊ゆえに離婚した自らの妻と関係を修復することを誓う。
名前：Kha Alme 国籍：インドネシア 性別：女性 職業：主婦、出版業	遺忘与回憶	優秀賞	パーキンソン病の老婆を介護する主人公は、ネットショッピングビジネスにのめり込む。老婆の家にある肖像画 (私) は主人公に苦言を与え続けるが、主人公は帰国後によく自分の愚かさに気付く。
名前：懐疼 国籍：ベトナム 性別：男性 職業：エンジニア	遊子的年節	青少年 審査員賞	主人公は雇主の都合で首になって早期帰国を求められるが、故郷で病を患う母のために不法滞在を続けながら工事を渡り歩く。ある日、工事現場で怪我をした主人公だったが、なんとか一命を取り留める。
名前：劉瑪莉索 国籍：フィリピン 性別：女性 職業：工場労働	向星星許願	青少年 審査 推薦賞	両親を失くした幼い兄妹の路上生活を描く。ある日、妹が病気になるが、周囲には助けてくれるものは誰もいない。最後の望みに星の願いをかける兄に、子どものない夫婦が偶然彼らを引き取ってくれることに。

入賞外作品：胡道明 (ベトナム) 「西貢陽光——四季、妳和我」  
翠蘭 (ベトナム) 「回台北的火車」  
吳秀瓊鸞 (ベトナム) 「我是越南人」  
吳山沙 (タイ) 「無題」  
Diaz Ibrahim (インドネシア) 「沖繩海灘上的曙光」  
Setyana Mblems (インドネシア) 「海洋之奴」

注

- 1 直接移民工文学賞に言及した先行研究としては、移民工文学賞を翻訳者や審査員らの協力関係の下で成立する新たな文学生成の場として捉えた宋家瑜『台湾移民工文学場域的生成：以文学賞為例』(国立清華大学台湾文学研究所修士論文 2016年)や、その概要や選考過程を日本語で紹介した赤松美和子「新移民の文学が描き始めた新たな台湾の多元化」『東亜』597号 (一般財団法人霞山会 2017年)、「多元化台湾現地レポート (1) 台湾文学の二つの挑戦—新移民文学と文白論争について」『東方』441号 (東方書店 2017年)等が挙げられる。
- 2 1989年10月に台湾政府は建設・製造業における労働力補填の要求から国内の労働市場を初めて外国人労働者へ開放、1992年5月には立法院で就業服務法が可決され、以降台湾の民間企業は合法的に外国人労働者を雇い入れることが可能となった。劉梅君は国内の労働市場を開放した1980年代の台湾では失業率はむしろ増加傾向にあって、台湾の産業界が必要としていたのは一般的な労働者ではなく、あくまで安価な外国人労働者の獲得であったと指摘している。劉梅君『『廉價外勞』論述的政治經濟學批判』(台灣社會學季刊 38, 2000年)
- 3 外国人労働者の数値については中華民国労働部のホームページ「労働統計月報」(2017年3月底：<http://>

- statdb.mol.gov.tw/html/mon/212060.htm、最終検索日 2018 年 5 月 8 日) を参照。労働者の性別は男性労働者が 281,392 人、女性労働者が 357,934 人と女性が全体の 6 割近くを占めている。国籍別で見れば、インドネシア人 251,103 人、ベトナム人 188,585 人、フィリピン人 139,972 人、タイ人 59,665 人、その他 1 人の順に多くなっている。
- 4 澤田佳世「超少子化・台湾の『男性化』する出生力とジェンダー化された再生産連鎖 国際結婚と人口政策をめぐって」伊藤り、足立真理子編『国際移動とく連鎖するジェンダー』(作品社 2008 年) 70 頁。
  - 5 結婚移住者の数値については内政部戸政司のホームページ「縣市出生按身分及生母生父原属国籍」を参照。結婚移住者については 1998 年以前の統計がないために、20 万人という数値はあくまで統計を取り始めた 1998 年以降の結婚移住者の総数を指している。
  - 6 藍佩嘉は当時一部の小学校や自治体では児童の安全保護を名目に外労の校内への出入を禁止したり、外労に「我是外労」といった名札の着用を求めるといった事態にまで発展していたことを指摘している(『聯合報』2001 年 10 月 23 日、2001 年 12 月 6 日版)。また 2005 年 8 月には高雄地下鉄建設現場において、タイ人労働者数百人が雇用者への待遇不満や差別意識を理由に暴動を起こすなど、外労や外配をめぐる問題は深刻な社会テーマとして認知されていった。
  - 7 藍佩嘉『跨国灰姑娘：当東南亞幫傭遇上台湾新富家庭』(行人出版社 2008 年) 99、130 頁。
  - 8 廖元豪「全球化趨勢中婚姻移民之人權保障 全球化、台湾新国族主義、人權論述の關係」、夏曉鵬編『騒動流移 UNQUIET MIGRATION』(台湾社会研究雑誌出版 2009 年) 191 頁。
  - 9 台湾政府は 1999 年には外国籍配偶者の自立した生活をサポートする「外籍新娘生活輔導實施計畫」を実施、2005 年には外籍配偶輔導基金において外配への医療補助や彼らの児童の保育を支援してきた。一方で、民間 NGO 組織においても 1995 年には社会学者夏曉鵬によって設立された「南洋台湾姊妹会」が高雄・美濃地区に暮らす外配たちの社会への適合を支援するプロジェクトを推進、2003 年には同じく NGO 組織が中心となって、外国人労働者や移民に関する政策批判・提言組織である「移民／住人権修法聯盟」(移盟) が設立され、政府も彼らの提言をもとに更なる具体的な政策立案に乗り出すようになった。
  - 10 台湾政府の打ち出した所謂「南向政策」は、李登輝、陳水扁、蔡英文政権時代にそれぞれ唱えられてきた。ASEAN 諸国との政治・経済的な関係を強めることで中国経済依存からの脱却を目指すこの政策は、とりわけ現在の蔡英文政権に強く見られ、総統就任後の 2017 年 2 月には「新南向政策」を国家の重要な経済戦略に位置付けることで、ASEAN 諸国との関係強化に努めている。
  - 11 龔尤倩「問題与討論」『文化研究』(2013 年 9 月) 243 - 244 頁。
  - 12 宋家瑜『台湾移工文学場域的生成：以文学賞為例』(国立清華大学台湾文学研究所修士論文 2016 年) 12 頁。
  - 13 移民工文学について考える際、中国人配偶者の存在がそこから排除されていることは非常に興味深い。曾芬によれば、通常ホスト社会との摩擦や衝突を恐れるために、政府は当該社会のマジョリティに近い人種・民族を移民として受け入れる傾向が強いが、台湾の場合はむしろ中国人配偶者といった「他者」が容易に「自己」になってしまうことを恐れていたと指摘している。曾熾芬「引進外籍勞工的國族政治」『台湾社会学刊』第三十二期、2004 年。一方で、趙剛は台湾の多元文化主義について、台湾政府が「多」元文化を強調することで、大陸中国とは違った「一」つの国家を建設しようとしていることを指摘している。趙剛『『多元文化』的修辭、政治和理論』、夏曉鵬編『騒動流移』前掲。
  - 14 張正は 2001 年から毎年台北市労働局によって開催されている「台北請聽我說(台北私の声を聞いてください)」と銘打たれた「外労ポエムフェスティバル」に主催者の一員として参加、自らが編集する「四方報」で集められた移民たちの声を『逃：我們的宝島，他們的牢』(時報出版 2012 年)、『離：我們的買賣，她們的一生』(時報出版 2013 年) として出版するなど、現在台湾における移民工運動のスポークスマン的な存在となっている。
  - 15 東南亞移民工『流 移動的生命力、浪潮中的台湾 第一、二屆移民工文学賞得獎作品集』(四方文創 2015 年) 290 頁。
  - 16 東南亞移民工『流』前掲、7 頁。
  - 17 移民工たちによる母国語創作は 2001 年から台北市労働局が中心となって開催している「台北請聽我說」と呼ばれる外労詩歌節でも行われている。しかし、この文芸イベントでの投稿者は「外労」に限定され、「外配」は含まれていない。また投稿作品は詩と散文が中心で、その規模も台北地区に限定されている。
  - 18 移民工文学賞の投稿用紙に性別の欄がないことから正確な男女比率は分からない。宋家瑜は正確な統計結果がないことを断りながら、受賞者した投稿者の多くが女性であることに加え、同じく東南アジア出身者たちの母語による文学賞である外労詩歌節の投稿者が男性 2 : 女性 8 の割合であったことを例に、移民工文学賞における女性投稿者の多さを指摘している。宋家瑜『台湾移工文学場域的生成：以文学賞為例』前掲、31 頁。
  - 19 教育部主催の文学賞設置に刺激される形で、それまで「國語」による創作しか認められてこなかった地方文

- 学賞においても、台南文学賞（台南）、夢花文学賞（苗栗）、打狗鳳邑文学賞（高雄）など、閩南、客家、原住民諸語を対象とした文学賞が相次いで設立されていった。
- 20 原住民の母語文学作品については、中国語創作を主として母語で創作を行う場合は投稿者が自ら中国語の対訳を添付することが義務付けられていた。
  - 21 シンガポールでは新聞「Banglar Kantha」が2008年からバングラディッシュ語による文学コンテストを開催、2015年からは投稿言語をインドネシア語に中国語、タガログ語にタミール語、パンジャブ語まで拡大している（林正尉「獅子、船廠与太陽：新加坡孟加拉移民の五個夢想」引用元ホームページ：<http://cwl502.blogspot.tw/2016/05/blog-post.html>）こうした現象は、領域内に多数の外国人労働者を抱える香港でも同様で、香港移民工牧中心はフィリピンやインドネシア人労働者による英語創作を雑誌「Work is Work」として発表している。
  - 22 東南亜移民工『流』前掲、14、9頁。
  - 23 審査委員たちの多くが「正義の具体化」として同賞を想定していたこともあり、当初は移民工たちの現実を過度に凄惨に描いた作品が入賞する傾向があるなど、移民工側からも疑義が提出されている。宋家瑜『台湾移工文学場域的生成：以文学賞為例』前掲、153頁。
  - 24 【第二屆移民工文学賞】決審會議記錄（成人組）を参照。引用元ホームページ：[http://2014tlam-tw.blogspot.tw/2015/07/blog-post\\_31.html](http://2014tlam-tw.blogspot.tw/2015/07/blog-post_31.html)
  - 25 宋家瑜『台湾移工文学場域的生成：以文学賞為例』前掲、161頁。
  - 26 宋家瑜『台湾移工文学場域的生成：以文学賞為例』前掲、161頁。
  - 27 宋家瑜『台湾移工文学場域的生成：以文学賞為例』前掲、160頁。
  - 28 駱以軍「夜裡の日記—評審意見」移民工文学賞のホームページから引用。<https://2014tlam-tw.blogspot.tw/2014/07/le-thuy-vinh.html>
  - 29 彼らブルーカラーに属する投稿者の文学的素養が低いという意味ではなく、あくまで中国語の翻訳能力についての疑義である。実際に、鍍金工場で働きながら投稿作品を翻訳していた王磊はインドネシアの文学サークルFLPの台湾支部支部長を務めており、第三回移民工文学賞でも見事大賞を受賞している。
  - 30 東南亜移民工『流』前掲、14頁。
  - 31 例えば「雨下的好像天上倒下来的」と訳した中国語を「傾盆而下、暴雨滂沱」、あるいは「動力之蛙」を「井底之蛙」にするなど、校正に立ち会った台湾人スタッフが母国語翻訳者の訳した文章をより自然な中国語表現へと修正していたことを明らかにしている。宋家瑜『台湾移工文学場域的生成：以文学賞為例』前掲、64頁。
  - 32 宋家瑜『台湾移工文学場域的生成：以文学賞為例』前掲、69頁。
  - 33 中国語ではなくあえて「国語」の言葉を使用しているのは、多元文化を標榜する台湾社会において、中国語が果たしている国民統合言語としての特権的位置を強調するためである。
  - 34 台湾の地方社会における多文化・多言語状況を描いた作品としては、ある客家人家庭で暮らすベトナム人、インドネシア人、台湾原住民（アミ族、タイヤル族）の関係を描いた張郢忻の散文『我家是聯合國』（玉山社2013年）や小説『織』（九歌出版社2017年）などがある。
  - 35 夏曉鵬「資本国際化下的国際結婚—以台湾的『外籍新娘』現象為例」93頁。1970年代における台湾の急速な経済発展は地方の農業を犠牲として都市部における工業を進展させてきたが、そこで失業した農村出身者たちの多くは、安価な労働力として都市部へ出稼ぎに向かっていった。だが、1980年代後半から解禁された「外労」の輸入によって再び失業状態に陥った彼らは、工業化によってすでに荒廃した農村へ戻らざるを得なくなった。夏曉鵬は台湾の「奇跡の経済発展」と共に大きくなった農村男性たちが、結婚適齢期を過ぎても結婚対象を見つけれずに東南アジア女性へ結婚相手を求めていったことを指摘しているが、そうした観点から見れば、「臺灣郎」たちにとって「外労」／「外配」の輸入政策は、ある意味で地続きの問題でもあったといえる。
  - 36 同じくインドネシア人男性の遠洋漁業について書かれたDiaz Ibrahimの作品「沖繩海灘上的曙光」では、台湾人雇用主との関係はほとんど描かれず、また作品も受賞を逃している。
  - 37 「前輩」とは先輩を意味する中国語だが、インドネシア語の原文では「SENPAI」と日本語でタイトルが打たれており、「中国語はまるで宇宙人の言葉のように難しかった」と述べる主人公が、老人と日本語を交えて会話をしていたことをうかがわせる内容になっている。
  - 38 東南亜移民工『航—破浪而来、逆風中的自由—第三屆移民工文学賞作品集』（四方文創2016年）91頁。

(2017年10月10日投稿受理、2018年2月14日採用決定)